熊本県博物館ネットワークセンターだより
熊本の自然と文化
編集・発行　熊本県博物館ネットワークセンター
2020 年 10 月 30 日
No. 47

イベント情報（令和２年 11 月～令和３年１月）

企画展　　会場：熊本県博物館ネットワークセンター　　入場無料

第３回企画展　「知ってる!?知らない!?鉱物のいろいろ!!」

○開催期間：令和２年 10 月 20 日（火）～12 月 27 日（日）

鉱物と聞いただけではよく分からない人もいるかもしれません。鉱物は、宝飾品や工業製品などの原料として使われており、意外と身近なものです。また、そのようには活用されていない鉱物も地球を構成する要素の一つです。

この展示では、鉱物のできる場所やでき方、鉱物の物理性質や特徴的な性質などの基本的な事柄について説明します。また、変わった形の鉱物や鉱物にまつわる話も紹介します。

めのう

いつもの光で見た時　紫外線ライトをあてた時

珪酸亜鉛鉱（けいさんあえんこう）

蛍石

藍鉄鉱（らんてっこう）に置き換（お　か）わった植物化石

第４回企画展　「ちょっと昔の暮らし探検　XI」

○開催期間：令和３年１月 11 日（月）～３月 14 日（日）

小学校 3 年生の社会科で習う道具を中心に昔懐かしい暮らしの様子や仕事の道具を一堂に紹介します。昭和 30 年代から 40 年代までは普通に使われていた、でも最近ではすっかり目にしなくなった道具を展示します。

～ご来館の皆様へのお願い～

○入館の際はマスクの着用をお願いします。
○入館時に、設置している消毒液による手指の消毒をお願いします。
○氏名・連絡先、健康状態の記入をお願いします。※感染症拡大防止策以外の目的では使用しません。
○館内では、周囲の人と 2m程度の間隔を取ってください。
○展示室の最大人数を 10 人程度とするために、入場をお待ちいただく場合があります。

No.244
民　俗

十五夜綱引きの綱

熊本県の南部では旧暦８月 15 日の十五夜に綱引きを行うところがあります。十五夜は里芋など畑作物の収穫祭の意味があると考えられていますが、綱引きを行うところでは綱を蛇や龍に見立て、とぐろを巻いた綱にお供え物をします。蛇や龍は水の神様で祓いや清めの力があると考えられており、子ども達が綱を持って集落を廻るところもあります。

写真１は上天草市大矢野町女鹿串（めがのくし）の綱引きの綱です。はっきりと龍を模して作るのは県内では珍しいものです。材料は稲藁（いなわら）、棕櫚（しゅろ）の皮、枇杷（びわ）の葉で、龍の目と舌は厚紙に赤いビニールテープを巻いて作られています。写真１の綱の長さは５ｍほどですが、かつては 15ｍくらいの綱を作っていたそうです。

写真１　十五夜の綱

女鹿串（めがのくし）の十五夜綱引きは月が出る頃から行われます。龍の頭を月に向けてとぐろを巻いた綱にすすきや饅頭などを供え、とぐろの中に 15 才の男の子が入って月に拝したら、子ども達が綱を持ち「マイコンダー、マイコンダー、フクノカミガマイコンダー」と言いながら家々を廻り（写真 2）、その後、集落の広場で綱引きと子ども相撲が行われます。持ち帰った綱の一部を柿やみかんなど果物の木にさげると実がよくなるといわれます。（迫田久美子）

写真２　綱を持って集落を廻る様子

No.245
動　物

ヒゴキムラグモ　*Heptathela higoensis*　（ハラフシグモ科）

キムラグモ類はハラフシグモ科に分類されるクモの一群で、国内では九州から南西諸島にかけて 10 種前後が分布しています。腹部の背面には「ハラフシグモ」の名の由来となる体節（たいせつ）の名残があり（写真 1）、同じ特徴を持ったクモの化石が古生代石炭紀の地層で見つかっていることから、「生きている化石」とも呼ばれています。

写真１　ヒゴキムラグモ（左）とキノボリトタテグモ（右）の腹部

キムラグモ類はいずれも林縁などの崖地に生息し、扉のような蓋のある巣穴に潜んで、近くを通る虫などを捕食しています（写真 2）。一般的なクモに比べて移動分散能力が低いため、地域ごとに別々の種に分かれているのですが、分類がまだ整理されておらず、「レッドデータブックくまもと 2019」でも「キムラグモ類」として準絶滅危惧に選定されています。

写真２　巣穴に潜むヒゴキムラグモ（熊本市）

写真３　ヒゴキムラグモ標本（宇城市）

写真 3 の標本は、宇城市の照葉樹林で採集されたものです。残念ながら採集の数ヶ月後には重機が入り、生息地ごと消滅してしまいましたが、その地に本種が生息していたことを証明する貴重な資料となっています。（中薗洋行）

No.246 歴　史　類寄頭書目録（るいよせとうしょもくろく）　（宇城市小田家資料）

写真１　抜書における記載年代と内容

本資料は、宇城市小田家資料に保管されていた「河江旧記抜書（ごうのえきゅうきぬきがき）」という資料の索引目録です。「河江旧記抜書」とは、江戸時代の熊本藩の地域行政機構である河江手永（ごうのえてなが）（現在の宇城市松橋町・小川町を管轄）に熊本藩庁の諸機関から出された通達やお触れ、手永業務の中で作成された記録などが一定の期間及び特定の項目ごとに収録された行政記録です。

本資料の冒頭には、「抜書」の巻数ごとに記載された年代とその内容が書かれ、例えば、第２巻の記載内容を見ると、「明和（めいわ）元二三四五六七八　御触状写（おふれじょううつし）」（写真１）とあることから、「抜書」の第２巻には、明和元年（1764）から明和８年（1771）までの御触状の写しが書かれているということがわかります。次に、3840 通分の行政記録が 140 項目に分類され、その項目ごとに「抜書」における巻数と掲載番号及び表題名が掲載されています（写真 2）。

写真２　項目ごとの掲載内容

140 項目の見出しや掲載されている文書表題には、河江手永の地域や村々に関する広範な事項が見られます。本資料は、これらの事項が「抜書」のどこに記載されているのかを効率よく調べることができるツールであり、また、藩や手永の記録の変遷を容易にたどることを可能にしたものであるといえます。（堤将太）

No.247 植　物　モロコシソウ　*Lysimachia sikokiana*　（サクラソウ科）

写真１　モロコシソウの裂開した果実
2009 年 6 月 16 日
撮影，甲佐岳.

モロコシソウは、温暖な地域の林内に生育する多年草です。葉は互生（ごせい）で、葉先と葉脚（ようきゃく）がとがった、卵形の葉です。夏には茎の上部の葉の付け根から細長い柄が伸び、その先に黄色い花が一つ咲きます。果実は熟すと灰白色になって５裂し、まるで白い花のように見えます（写真 1）。和名モロコシソウの由来は、「唐土（もろこし：中国を指す古い呼び名）」、つまり外国からきた植物と考えられたことによります。しかし、実際は、モロコシソウは日本では関東地方から沖縄県まで自生する、日本の在来の植物です。

写真 2 の標本は、1960 年に球磨郡で前原勘次郎（まえばらかんじろう）氏（1890-1975）によって採集されたものです。彼は、県立人吉高等女学校などに勤務しつつ植物の研究も進めた人物で、南九州の植物研究史上重要な文献である『南肥植物誌』を出版しました。彼が作成した標本は、学術的に利用されたものも多く、全国の主要な大学や博物館にも収められており、当センターにも約 40 点の維管束植物標本が収蔵されています。この標本はその中の一つです。

写真２　モロコシソウの標本

また、人吉城歴史館には彼が作成した標本約 33,000 点が収蔵されています。それらは「令和２年７月豪雨」による球磨川の氾濫で浸水被害を受け、現在、当センターを含めた全国 30 余の大学、博物館等の協力で、洗浄や乾燥の処理が進められています。（前田哲弥）

No.248
地　学

山甲川流紋岩類（やまこうがわりゅうもんがんるい）

阿蘇郡小国町西部、杖立川左岸の山は、台形のような地形をしています（メサ地形）。このメサ地形を作っているのは、山甲川流紋岩類と呼ばれる火山噴出物（ふんしゅつぶつ）です。

山甲川流紋岩類は、溶岩（ようがん）と火山の噴火（ふんか）で噴（ふ）き出した物が固まってできた火砕岩（かさいがん）からなる約100ｍの厚さの岩体です。岩体の最下部と上部は流れ模様（もよう）（流理構造（りゅうりこうぞう））の発達した流紋岩で、下部は軽石の層、中部は流紋岩質の溶岩や火砕岩です。このうち、メサ地形の台地面を流れる山甲川には、上部の流紋岩溶岩が分布しており、河床では流理構造が発達した岩石を見ることができます（写真１）。

写真１　山甲川河床に露出する流紋岩

山甲川河床では見た目の面白い岩石が見られます。その１つが、写真２の球顆玻璃斑岩（きゅうかはりはんがん）です。多数の丸い粒（球顆（きゅうか））が集まってできており、すき間は黒曜岩（こくようがん）（ガラス質の岩石）で埋められています。なお、この資料は「熊本の自然と文化」No.31で紹介しています。２つめは写真３の黒曜岩です。黒い岩石全体にクリストバル石（せき）の白い斑点（はんてん）がちりばめられた、「スノーフレーク・オブシディアン（雪片黒曜岩（せっぺんこくようがん））」と呼ばれるものです。写真４の岩石は黒曜岩（写真３）に似ていますが、写真左上の拡大写真を見ると、クリストバル石や長石（ちょうせき）が放射状に集まってできた灰色の球顆と白く透明な鉱物（石英（せきえい）や長石）の粒が黒曜岩の中に入っています。このような岩石を黒曜岩質玻璃斑岩（こくようがんしつはりはんがん）といいます。

写真２　球顆玻璃斑岩（No.31より）

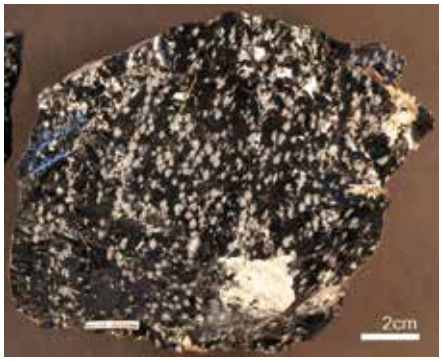


写真３　黒曜岩

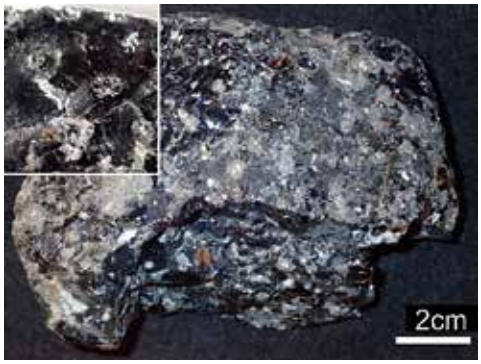
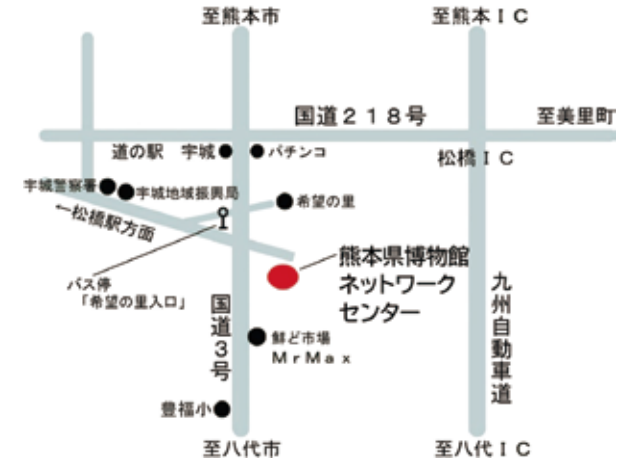


写真４　黒曜岩質玻璃斑岩

これらは同じマグマが冷えてできた岩石ですが、冷え固まる時の条件の違いによって、見た目が異なってきます。このような違いは他の火山地域でも見られますので、探してみてはいかがでしょうか。（廣田志乃）

熊本県博物館ネットワークセンター
〒869－0524　宇城市松橋町豊福1695
TEL：0964－34－3301　　FAX：0964－34－3302
E-mail：hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP：https://kumamoto-museum.net/kmnc/
［公共交通機関］
○九州産交バス
　松橋バスターミナルより宮原経由
　八代産交行き「希望の里入口」下車
○ＪＲ
　松橋駅より約３km